

1本のボールペンに想うこと ～あなたのペンケースにボールペンは何本ありますか～

一時帰国の際に小中学校で授業をした際に生徒や先生に筆箱に入っている鉛筆やボールペンの数を聞くと、大半の生徒は2本以上持っている、先生はボールペンの数が多くて把握していないという答えもなかにはありました。子どもに筆箱の中の鉛筆、ボールペンを数えてもらった後に“その鉛筆やボールペンを最後まで大切に使う”ように促しました。かつて日本で仕事をしていたころ、ボールペンを最後まで使うことなく次から次へと買い筆箱はばんぱんでした。しかし、ガーナに来てからというもの1本のボールペンを最後まで使いきるようになりました。私の見ている村の子どもたちは、それはそれは1本のボールペンを最後まで使いきります。教科書が無いので、黒板に先生が書いた教科書の文をそのまま板書するのですから、すぐにボールペンのインクはなくなり使えなくなります。プラスチックの外側が割れ芯だけになったボールペンを器用に使う生徒もいれば、まだインクの残量はあるけれど書けなくなったために振りながら書く生徒もいます。1本のボールペンを兄弟で共有している生徒もいます。試験になればボールペンを持っていない生徒は、試験をしていないクラスの生徒から借ります。しかし貸した側の生徒も授業の板書をしなければなりません。ボールペンのない生徒はある生徒から借りて・・・こうした光景は私が村で活動し始めた当初から今も変わりなくあります。先日、工作で折り紙を使っておひな様を作った時もそうでした。試験をしていた中学3年生の生徒に授業をおこなった中学2年生の生徒の数人がボールペンを貸していました。おひな様お内裏様に顔を描く時になってボールペンがあちこち移動します。またかと思いながらも子どもたちの作品に目を向けるようにしたものでした。与えれば良いというものではありません。けれども学業に必要なボールペンがないのです。こうした歯がゆさもあってそろばん教室のご褒美やクリスマスプレゼントに青色のボールペンを取り入れています。前回のクリスマスプレゼントにノートと青いボールペンを送りました。その次の日から、子どもたちは真新しい青いボールペンをそろばん教室に持ってきて使用していました。子ども本人が使っていたことをとても嬉しく思いました。ボールペンを手にした子どもたちは、しばらくの間はそろばん教室でそのボールペンを使っていました。しかし、真新しくても授業での板書もあればインクも直ぐ減るだろうし、紛失してしまうということもあるでしょう。そんなある日、ご褒美にキラキラ輝くボールペンのセットを手にしたコンスタンス君が、そのセットの中にある書いた字がキラキラ輝く青色のボールペンを持ってそろばん教室に来ました。そろばん教室に来た時は出席簿にマークをつけます。その〇印が青色にキラキラと輝いていました。コンスタンス君が初めてではありません、過去にやはりこのキラキラペンを手にしたギルバード君も緑色のキラキラペンを持ってきたのでした。このキラキラペン、勉強をする時にはふさわしいとは思いません。それなのにご褒美としてあげるのかというディレンマはあります。ギルバード君の時と同じようにコンスタンス君に言いました。

「このシャイニングペンは、アートの時に使おう。そろばんをやる時には使わない。」と。すると、この話を聞いたギディオ君がインクの少ないボールペンを振り書けることを確認してコンスタンス君に貸したのです。ギディオ君はプラスチック部分が欠け根元にほんの少しだけプラスチックが残っているインクの出の悪いボールペンを使っていました。このペンも振り振り書いていたので、おそらくコンスタンス君に貸したのは予備で持ってきていたのでしょう。そろばん教室で使ってはダメなボールペンがご褒美にあるなんて。そう思われても仕方がないかもしれません。しかし、公なものに書かれた字がキラキラしているものはありません。あくまでもデザインする時のものだと私は思うのです。これまでキラキラペンを手にした子どもが、授業で板書に使っているかはわかりません。仮にその使った書いたノートを目にした先生は注意をするのでしょうか。文化の違い、考え方の違いは多いにあるかもしれませんが注意をしてほしいなと思うのです。

この文を読み“1本のボールペンを最後まで使いきる”ことを実践してもらえると嬉しいなと思います。



ご褒美のキラキラペンセットとノートを手にするコンスタンス君

スプートニクガーナ

2017年3月7日

国分敏子